恋の果実

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋の果実

【Ｎコード】
Ｎ２７１８Ｚ

【作者名】
葵

【あらすじ】
あることをきっかけに人が怖くなり、信じられなくなった少女、桃山桜。またあることをきっかけに人と距離を置くようになった少年、藤咲拓海。そして、この二人の過去には、同じ人物が関わっていた！？自分の過去と戦う中で、いろいろなものを得ていく二人。そんな二人を支えていく親友二人。二人の恋の果実は実るのか！？恋愛と友情、二つを一度に楽しめる学園恋愛小説！

登場人物

桃山　桜
身長１６０ｃｍ、体重４９ｋｇ、誕生日９月２９日、血液型Ａ
スタイルも周りの女子と比べていいが、友達でない人と話すときは暗く、話づらいと思われているため学校では、モテない。だが本当は、すごく明るくて、人の笑顔を見るのが大好きな女の子。桜高等学校１年生Ａ組。華とはクラスメイトであり親友。

藤咲　拓海
身長１７５ｃｍ、体重５０ｋｇ、誕生日４月２６日、血液型ＡＢ
背が高く、スポーツ万能のクールな男の子。学校では、１番、２番を争うほどの人気者。女子だけでなく、男子にも人気で尊敬されているが、なんらかの理由で女子を嫌っている。桜高等学校１年生Ｂ組。華とはいとこ、蓮とは幼馴染であり親友。

伊集院　華
身長１６２ｃｍ、体重４２ｋｇ、誕生日１月７日、血液型Ａ
スタイルばつぐんで、モデルなみにいい。リーダーシップがあり、学級委員もやっている優しい女の子。そのためすごくモテている。桜高等学校１年生Ａ組。桜とは、クラスメイトであり親友。拓海とはいとこ、蓮とは幼馴染。

一ノ瀬　連
身長１７２ｃｍ、体重５２ｋｇ、誕生日１１月１日、血液型Ｂ
背が高くて、優しい男の子。バスケ部に所属しており、スカウトが来るはどにうまい。学校では、拓海と同じく、１番、２番を争うほどの人気者。人前ではしっかり者だが、拓海や華の前では、本来の自分を出している。桜高等学校１年生Ｂ組。華と拓海とは幼馴染。

拓海とは、クラスメイトであり親友。

本田　彩

身長１５８ｃｍ、体重４２ｋｇ、誕生日１２月１２日、血液型Ｏ

桜や華とは、同じ小学校で、小学５年生の冬に違う学校に転校していった。そして、桜たちの通う桜高等学校に転校してきた、活発な女の子で、スタイルもいい。桜高等学校１年生Ａ組。拓海のことが好きで、桜のことを心の中では嫌っている。桜と拓海の過去に関係している。

運命のいたずら（前書き）

もしよろしければ、感想、評価をしていただけるとありがたいです。どうぞ、お楽しみください。

運命のいたずら

【桜　ｓｉｄｅ】

季節は春から少しずつ周りの風景が変わり、だんだんと夏の景色に移り変わる。

私、桃山桜はここ桜高等学校に入学して数ヵ月が経った。

今日から夏服に変わり、通学路も夏にふさわしい明るい色に変わっていく。

周りの子も、もう学校生活に慣れ、新しい友達と楽しそうに話している。

私が校門のあたりに来たころには、いつにもましてにぎやかで、まるでパーティー会場のようだ。

「桜ー！！」

後ろから、少し高い声が私の耳に届く。

「華！！」

私は後ろに振り返ると、後ろからスラッとした体の女の子が手を振りながら走ってくる。それにあわせて彼女の長い髪が揺れている。

彼女は伊集院華。私のクラスメイトで親友。彼女は私よりも少し背が高くて、モデルのようにスタイルがいい。リーダーシップが

あるため、学級委員もやっている優しい女の子。
この数ヵ月の間に、数人の男の子に告白されるほどにモテる。だが、誰が告白してもすべて断っている。

「藤咲君と一ノ瀬君よ！」

私たちが校門を通って、校舎のほうへ歩いていると、校舎の入り口のほうから女の子たちの甲高（かんだか）い声が聞こえてくる。

「あっ！　拓海と蓮だ！　あいかわらず人気だね」

と、華が感心したかのような目で見ながら言う。
でも、私はそんなふうにすごいとは思えない。そういう人気者の人ほど、人を裏切りやすいから。だから私は、

「うん……そうだね」

そっけない態度で返事をしてしまった。だが華は、いつものように優しく笑ってくれた。どうやら、私の気持ちを理解してくれたらしい。私は少し安心した。

彼らは、数ヵ月間で学校で1番、2番を争うほどの人気者になった。
二人ともすごく背が高い。女の子が周りにいてもすぐにわかる。

藤咲君は、スポーツ万能でクールな男の子。さまざまな部に助っ人を頼まれるくらい、運動神経がいいらしい。それだけでなく、彼は仲間に的確なアドバイスをし、仲間を思いやっている。だから

女の子だけでなく、男の子にも尊敬されている。
だが、彼はなぜか女の子を嫌っている。仲が良いとすれば、いとこの華ぐらいだ。うわさではトラウマがあるらしい。
まぁ、スポーツ万能でスタイルもよく、クールとくれば、好きにならない女の子などいないだろう。

一ノ瀬君は、バスケ部に所属しており、スカウトが来るほどにうまいらしい。
それだけでなく、彼は笑顔がとてもかっこよく優しい男の子。
あの笑顔で優しくされたら、キュン死してしまうかもしれない。

絶大的な人気を誇るこの二人は、学校のプリンスと呼ばれている。

「ねぇ桜、今度の休日久しぶりに、服とか買いにいかない？」
服かぁ。そういえば、最近買ってなかったっけ。
「うん。行く」
「よし。じゃぁ、今度の休日桜の家に行くね」
「了解」
わーい。楽しみだなぁー。

ある日の休日、私の住んでいるアパートに引っ越し業者のトラックが来ていた。どうやら、誰かが引っ越してきたらしい。
こんな時期に引っ越してくるなんて珍しいなぁ。社会人かな？
そう思いながら私は部屋に戻った。

私が華と出かけるために準備していると、
ピーンポーン
インターホンの音が部屋の中に響く。

「華かな？　はーい」

華と出かける約束をしていた私は、華かと思い急いで扉を開く。
しかしそこにいたのは、

「今日から隣の部屋に引っ越してきた、藤咲拓海です」

そう、目の前にいたのは私が最も関わりたくなかった、あの学校のプリンス。藤咲君だった。
私もすごく驚いていたが、彼も目を丸くして驚いている。
それもそのはずだ。彼は女の子を嫌っている。隣人が女。しかも同じ学校の人間なれば彼にとっては最悪だろう。
しかも今の私の格好は、短いワンピースにヒールをはいている。学校での地味な私がするような格好ではない。
まぁ、学校での私はあまり人とは話さず、話しかけられたとしてもそっけない態度。そして、自分ではあまり自覚していないが、周りの話では暗いオーラを出しているらしい。
だが、それはすべて偽りの自分だ。
本来の私は学校での私とは逆だ。

だから休日は本来の私の好む格好をしている。

「この部屋に住んでいる桃山桜です。これからよろしくお願いします」

とにかく、挨拶はしておかないと失礼だよね。

「こちらこそよろしくお願いします。つまらないものですがどうぞ」

と、お菓子のようなものをくれた。

「わざわざありがとうございます」

私は深々とお辞儀をする。

「いえ。では、失礼します」

そう言って彼は自分の部屋に戻っていった。

まさか、隣人が藤咲君だなんて……。この格好も見られちゃったし……。まぁ、藤咲君は女の子とは話さないし大丈夫だよね。

絶対に知られてはいけない。偽りの自分を演じきらなければならない。

私は、絶対にあの人の思い通りにはならない。

この瞬間が、彼女の運命を変える瞬間だったのだ。まさか、隣人から同じ部屋に住むことになるなんて考えもしなかったのだから……。

もうこんな時間！　はやく晩ごはんの買い物に行かないと！
華との買い物を終え、家から帰ってくると、もうセールが終わってしまいそうな時間だった！

私は、両親が仕事の関係で外国にいるため、私は今一人暮らしをしている。だから、なるべく安いものを買って、お金を浮かせなければならないのだ。

よし！　今日は肉じゃがにしよう！
私は一番安かったじゃがいもを買い、肉じゃがの材料を買って、家に帰る。

私が家に帰ると、回覧板が届いていた。
藤咲君のところに届けないといけないよね……。
私はしかたなく隣の部屋に向かう。
すると隣の部屋から……

ドタン！！

という大きな音が！
私は急いで隣の部屋の扉をたたく。

「藤咲君！！　藤咲君！！」

呼びかけても返事がない。
いないってことはないよね？　物音したし。
ドアノブに手をかけると、
「開いてる？」
鍵がかかっていなかったため藤咲君の部屋に入る。
「藤咲君？」
やっぱり返事がない。奥の部屋に行くと、
「藤咲君！！」
藤咲君が倒れていた！
私は扉を開け放したまま、急いで藤咲君のもとに駆け寄る。
「藤咲君！！」
呼びかけても返事がない。
呼吸はできているようだが、答える気力まではないようだ。
「すごい熱！」
額には大粒の汗が滲み出ている。
「大変！　はやく病院に行かないと！！」
私はさっそく病院に電話をする。

「はい。こちら救急センターです。火事ですか？　救急ですか？」

数コールの機械音のあと、すぐに女性の声が聞こえた。

「もしもし！！　救急車をお願いします」

「落ち着いてください。すぐに向かいますので、そちらの住所を教えてください」

「星川町3丁目5番地のグリーンコーポの２０２号室です」

「倒れた方の様子を教えてください」

たぶん、応急処置のためだろう。

私が見たところ、外傷は見当たらない。

「外傷は見られませんが、大きな音がしたので、頭を打ったかもしれません！はやく来てください！お願いします！」

「わかりました。では、すぐに向かいます」

そう言って電話がきれた。

その数分後、救急車が来た。

私は病院まで付き添い、そのまま家に帰った。

私が居てもなにもできないしね。

私がＴｖを見ていると、

ピーンポーン

こんな時間に誰だろう？
今日はお客が多いなぁ。

「はーい」

私は目の前にいる人物を見て驚いた。

「藤咲君！？　もう体調は大丈夫なの？」

そう、そこにいたのは藤咲君。

「あぁ。もう大丈夫だ」

よかった。もう大丈夫なんだ。

「桃山、病院に付き添ってくれたんだろう？　ありがとう」

「えっ！？　なんでそれを？」

だって、私が病院にいたのは数分だけだし、藤咲君まだ寝てたから、気づくはずがない。

「女の子がいたって看護師の人が言ってたから」

あっ！　それで知ってたのか。私は心の中で納得していた。

「あの……ごめんなさい。勝手に部屋に入ってしまって……大きな音が聞こえたから……」

私が言葉に詰まっていると、

「別にいいよ。桃山が来てくれなっかたら危なかったし。本当にありがとう」

「いえ。そんなこと……」

でも藤咲君、なんで怒らないの？　女の子嫌ってるなら、嫌そうな顔してもおかしくないのに……

「じゃぁまた」

「あっ！　はい」

そう言って私は扉を閉めた。

藤咲君、なんで学校では笑わないんだろう？　学校で笑ってるところ、見たことないし。

それに、学校での雰囲気と今の雰囲気も、全然違ったような気がする。気のせいかな？

【拓海　ｓｉｄｅ】

「ん……う？」

目を覚ますと、俺はベッドで横になっていた。

だが俺は、すぐに自分の部屋でないことに気付く。
ここ、病院か？

ガラガラガラ

扉を開ける音がした。

「気づかれましたか？　もう熱も下がられましたし、もう大丈夫ですよ」

俺、熱で倒れたのか？
でも、誰が救急車を？

「あの、誰が連絡したんですか？」

俺は部屋に入ってきた看護師に尋ねる。
すると、意外な答えが返ってきた。

「あー。えっと、誰が連絡したかは知りませんが、女の子が心配そうにあなたのすぐ隣で付き添っていましたよ」

女？まさか、桃山？

まぁとにかく、桃山には礼を言っておかないとな。

俺はすぐに帰る準備をし、すぐに桃山の部屋に向かう。
チャイムを鳴らすと、

「はーい」

部屋の中から桃山の声が聞こえてくる。
彼女は部屋から出てくると、

「藤咲君！？　もう体調は大丈夫なの？」

と、彼女は心配したかのような顔で見てきた。

「あぁ。もう大丈夫だ」

すると彼女は安心したかのように少し笑った。

「桃山、病院に付き添ってくれたんだろう？　ありがとう」

「えっ！？　なんでそれを？」

彼女は目を見開きながらこっちを見ている。それもそのはずだ。
彼女は気づいていないと思っているのだから。

「女の子がいたって看護師の人が言ってたから」

そう言うと彼女は、納得したような顔をしていた。
そのあと彼女は、さっきまでの表情とは違い、焦ったような顔しながら、

「あの……ごめんなさい。勝手に部屋に入ってしまって……。大きな音がしたから」

「別にいいよ。桃山が来てくれなかったら危なかったし」

彼女は安心したような顔をして笑ってくれた。

「じゃぁまた」

「あっ！　はい」

桃山は、なんで学校では、あんなふうに笑ったりしないんだ？笑ったほうがかわいいのに。

でも、あの笑顔に一瞬、ドキッとしたかもな。

予想外の接近（前書き）

予想外の接近

【桜　ｓｉｄｅ】

あれから数日が経った。

あれから、私も少しずつ藤咲君と普通に話せるようになってきている。

最近ではご飯を作って部屋に届けていることもしばしば。なんでも、バイトばかりで栄養バランスの良い食事をしていないらしい。そのため、たまに私が作って届けている。

私が部屋に届けると、子供のように無邪気な顔で笑うので、それがいつしか可愛いと思ってしまう自分がいる。

私がいつも通りご飯を作っていると、

ピーンポーン

誰だろう？

私は扉を開けた瞬間、目が点になるほどに驚いた。

「藤咲君？　どうしたの？」

そこにいたのは藤咲君。

しかし、今の藤咲君は頭から水をかぶったかのようにびしょ濡れで、今にも風邪をひきそうなくらい寒そう。体も震えてるし。

「とにかく入って。すぐにタオルと着替え持ってくるから」

私は急いでタオルと着替えを取りに行く。

「はい。タオルと着替え。お父さんのだから、大きいかもしれないけど」

ふぅー。お父さんの小さくなった服が残っててよかった。

「やっぱり大きかったね」

「あぁ。そうだな」

まぁ、これで風邪をひくことはなさそう。

「藤咲君、なんでそんなにびしょ濡れになったの？」

「洗い物してたら、水道管が壊れて部屋の中がびしょ濡れになった。まぁ、家具も全然ないからいいんだけど」

それでびしょ濡れになったのか。

「でも藤咲君、これからどうするの？」

「えっ？」

藤咲君は急に困ったような顔をした。

「だって、部屋がびしょ濡れってことは、当分の間住むところな

いじゃん？　だからどうするのかと思いまして」

藤咲君、下を向いたまま動かないし。どうしたんだろう？

「藤咲君、ご両親のところには戻れないの？」

だって、私みたいな事情ではないだろうし。

すると藤咲君の体がピクリと動いたのがわかった。

「あの家には、戻りたくない」

そう小さな声で答える藤咲君。

家でなにかあったのかな？　まぁ、こんな時期に引っ越してきたのだから、それなりの理由はあるのだろう。

でも、家に帰れないってことは行くところもないよね。よし！

「藤咲君、ここに住まない？　行くとこ、ないんでしょ？」

藤咲君は目を丸くして驚いている様子。

男の子と住むなんて、私も正直言って戸惑う。だけど、目の前に困っている人がいるのにほうっておけないよ。

「いいのか？」

「うん」

これで、藤咲君は不幸にならなくてすむよね。誰かが不幸になるのはもう見たくないから。

「桃山、本当にありがとう」

「どういたしまして」

これで、よかったんだよね。

というわけで、私は藤咲君と同居することになってしまった？

【拓海　ｓｉｄｅ】

俺は今、桃山の部屋に居る。

そう、俺の部屋がびしょ濡れになってしまったため、俺は桃山と一緒に住むことになった。

これは数時間前にさかのぼる。

俺が部屋で洗い物をしていると、急に水が出てきてしまった。俺はもちろん、どうにか止めようと頑張ってみたが、止まるどころか悪化してしまい、俺の服はもちろん部屋までびしょ濡れになってしまった。

俺は桃山の部屋に行き、服を貸してもらった。

桃山に事情を話した。

すると桃山は、

「藤咲君、ご両親のところには戻れないの？」

あの家に戻る？
戻れないわけではない。ただ、俺が戻りたくない。
「あの家には、戻りたくない」
自分でも驚くくらいの小さな声だった。

俺の家は、代々和菓子屋をやっている。俺はその跡取りなのだ。
だが俺は、店を継ぐ気など全くない。
なぜなら俺の両親は店ばかりで、俺にかまってくれたことなど一度もなかった。
俺は親の愛情など味わったことなんてない。
両親にとって俺はただの道具でしかない。
だから俺は、こんな時期にこのアパートに引っ越してきたのである。
すると、桃山から驚くような提案があった。
「藤咲君、ここに住まない？　行くとこ、ないんでしょ？」
いいのか？だって、桃山俺のこと嫌ってるんじゃ……初めて挨拶に行ったとき、俺の顔見ようとしなかったし。
「いいのか？」

「うん」

桃山には、感謝してもしきれないな。

桃山もＯｋしてくれたし、これでしばらくは安心だな。

一番近くにいる存在

【桜　Ｓｉｄｅ】

私は学校に行って華に同じ部屋で住むことになったことを報告した。

すると華は少し考えたような顔をしながら、

「ふぅーん。拓海がねぇー」

どうやら、藤咲君がそんな行動をとったのが不思議らしい。

「じゃぁ桜は拓海の一番近くにいる存在なんだ？」

「えっ？一番近くにいる……存在？」

一番近くにいる存在？　私が？　まぁ一緒に住んでるんだし、そう言われればそうなのかもしれないけど。

「そう。それに桜、拓海のことが好きなんでしょ？」

「えっ！？　私が藤咲君を？」

私は目を丸くしながら、華に聞き返してしまった。

「だって桜、拓海のこと話すときすごく楽しそうだよ。」

華が嬉しそうに答える。

「だから、桜が昔のように恋してくれることが嬉しくてたまらないんだよ。あれ以来、恋なんてしてないでしょ？」

私が、恋をしている？　藤咲君に？

「そんなこと、あるはずないよ……」

つい、心の声を口に出してしまった。

「桜！？」

このままだと、過去の記憶がよみがえってきてしまう。

「華ごめん。今のは聞かなかったことにして。それと、先生に体調が悪いから保健室に行くって言っといて」

そう華に言い、私は教室を飛び出した。

私が向かっているのは保健室ではない。屋上だ。

集中できないときや考え事があるときは、いつも屋上に行く。屋上で風にあたりながら、心を落ち着かせるのだ。

「ふぅー。やっと着いた」

私の教室から屋上までは結構遠い。

華の言葉が、頭から離れない。

あれ以来、恋なんていてないでしょ？

そう、私はあの日から恋なんてしていない。5年前のあの日から、一度も……。あの日、私の中の何かが壊れてしまってからは一度も……。

そう思いながら、自分のお気に入りの場所に行く。日当たりが良くて、風がよく来る場所。

でも、そこには一つの人影があった。少しずつ近づいてみると、そこにいたのは……

「藤咲君！？」

そう。そこにいたのは藤咲君だった。

「桃山？　なんでこんな所にいんの？」

彼もこっちに気付いたのか、私のほうに体を向けて不思議そうな顔をしながら聞いてきた。

「私は、サボった。授業集中できそうになくて」

今は藤咲君と私だけだし、いつも通りに話していいよね。

「藤咲君はどうしたの？」

藤咲君のサボったのかな？　そう思いながら聞いてみる。

「俺は当然サボり」

予想通りの答えが返ってきた。

「同じだね」

そう言って私は笑った。

「そうだな」

すると、藤咲君も子供のような笑顔を見せてくれた。

その時、私の心臓が速くなっていることに気が付いた。

私、ドキドキしてる？　まぁ、すぐに収まるよね。

私はまだ気づいていなかった。この正体に……

クラスの変化

【桜　Ｓｉｄｅ】

もうすぐ夏休み！　当然、学校でも夏休みの話題で持ちきりだ。

太陽がいつもよりもまぶしく、予定よりも早く目が覚める。

私はいつも通り、昨日の晩ご飯の残り物などを使ってお弁当を作っている。学校には学食もあるから、別にお弁当でなくてもいいのだが、料理をするのは好きだし、お金も浮くので、いつもお弁当を作っている。

今日は、私の分のお弁当と、藤咲君のお弁当を作らなければならない。なんでもバイト代がピンチらしく、昨日作ってくれと言われたので、作ることにした。

私が急いでお弁当を作っていると、後ろから

「桃山、おはよう」

後ろに振り向くと、眠たそうに目をこすりながらあくびをしている藤咲君の姿があった。

「おはよう。藤咲君」

私は笑顔で藤咲君に挨拶をする。

「桃山悪いな。俺のまで作らせちまって」

「別に大丈夫だよ」

私は笑顔で答える。

私は気合を入れすぎてしまい、時間通りにできなかった。そのため、私と藤咲君は遅刻しそうになってしまった。

私たちは急いで学校に向かう。

「藤咲君、またね」

「あぁ」

藤咲君と下駄箱のところで別れ、私は一足さきに教室に向かう。

「はぁー。間に合った」

どうやら、まだ先生は来ていないらしい。

「桜、おはよう」

華が私に気付いたのか、こちらに向かって来た。

「おはよう。華」

私は呼吸を整え、華に挨拶をした。

「桜が遅刻しそうになるなんて珍しいね。何かあったの？」

ギクッ！　今それを聞くのか。話しづらいなぁ。

キーンコーンカーンコーン

私が話しづらそうにしていると、タイミングよくチャイムが鳴った。

「桜、あとでちゃんと話してもらうからね」

「はい」

うー。華にあとで質問ばっかりされそう。

いつのまにか昼休みになってしまっていた。

ついに昼休みが来てしまった。

「桜、中庭で食べよう」

「うん」

私は自分のお弁当箱を出そうと鞄の中を見る。

えっ……。お弁当が、ない？　まさか、忘れてきた？

そのとき、

「桃山！」

小さかったが、私を呼ぶ声がした。
私は声のしたほうに振り向く。
「藤咲君！」
扉のほうを見てみると、藤咲君が立っていた。
藤咲君が私に向かって手招きをするので、私は急いで彼のもとに向かう。
「どうしたの？藤咲君」
私は首をかしげながら聞く。
「はい。これ」
「えっ？」
藤咲君が持っているのは、私のお弁当箱。なんで藤咲君が持ってるの？
「桃山、俺のは渡しておいて自分のはすっかり忘れてるから、届けに来た」
あっ！　だから藤咲君が私のお弁当を持ってるのか。
「藤咲君、ありがとう」
本当、藤咲君には感謝してもしきれないや。これでお昼ご飯にあ

りつける。

「それはいいんだけど、クラスの奴ら大丈夫か？」

藤咲君が私の顔色をうかがいながら聞いてきた。

「大丈夫だよ。適当に理由言ってごまかすし」

藤咲君にそう言ってごまかした。藤咲君には心配かけたくないしね。

でも、本当はすごく怖い。また、あの頃のようになるのが怖い。

「それじゃぁ私、教室に戻るね」

私は恐怖を悟られないように笑った。

「あぁ」

藤咲君に気付かれてないよね。

私は心の中でびくびくしながら教室に戻る。すると、教室の空気が明らかにいつもと違っていることに気が付く。　私は教室に入り、自分の席に着く。

するとこのクラスでリーダー的存在のグループが私の机の周りを囲む。そのうちの一人の女の子が、口を開く。

「桃山さん」

私の体がピクリと動く。

「何？」

たぶん、私の顔はひきずっているだろう。自分でもわかる。それに、体も震えてるし。

「さっき、藤咲君と一緒にいたよね？　どうしたの？」

そんなことを笑顔で聞いてくる。でも、私はその笑顔を信じることができなかった。あの頃と、同じになるのが怖いから……。

私が下を向いたまま黙っていると、

「藤咲君が、先生から預かった手紙を桜に渡しただけだよ」

私を囲んでいたグループの子たちの後ろから、華の声が聞こえた。

「華……？」

華？　助けてくれたの？

「ふぅーん。そうなんだぁ」

そう言って私の周りにいた子たちは離れていった。

「桜、大丈夫？」

華はすぐ私のもとに来てくれた。華が親友でよかった。私は改めてそう思った。

「華、ありがとう」

私は華に、最高の笑顔をプレゼントした。

それを見て華も笑ってくれた。

「それはいいんだけど、本当の理由は？　朝のことと関係あるんでしょ？」

えっ！　華、今それ聞くの？　本当、華は油断ならないな。

「お弁当作ったんだけど、時間がなくなっちゃって、そのあげくに自分のお弁当を忘れた」

「それで拓海が来たわけね」

私は縦に首を振った。

「へぇー。さっそくラブラブだね」

「ちっ違う！」

華、なんでいっつも私をからかうんだろ？　私をからかって面白いのかな？

「でもよかった」

「えっ！」

華が急にそんなことを言うので驚いてしまった。

「桜が私以外の人にも、笑顔を見せるようになってきてるから」

華以外にも笑顔を？

「桜、拓海と話してるとき、すごく楽しそうにしてるからさ」

楽しそう……か。昔のそんなふうだったな。あのときまでは……。

その日の放課後、私は買い物を終え、家に向かっている途中

「桃山！」

後ろから私を呼ぶ声がした。

後ろに振り返り、その人物を確かめる。

「藤咲君！」

藤咲君が、後ろから走ってきた。

「今日は帰りはやいんだね」

「あぁ。今日はバイトも休みだしな」

だから帰りがはやいのか。

「桃山、今日の飯はなんだ？」

「カレーだよ」

「よし！はやく帰ろう」

なんだろう？　放課後になってから、嫌な予感がする。なんで？

最初の一歩

【桜　Ｓｉｄｅ】

「桃山、ちょっと話があるんだけど」

私が買い物を終え、さっそく夕飯の支度をしようと台所に行く途中、藤咲君に声をかけられた。それも、いつもの声よりもすごく低めの声で……

なんだろう？

そう思い、後ろに振り返る。

「ここに座って」

真剣な目なのに、すごく低めの声で言う藤咲君。そんな顔で言われた断れるわけもなく、彼の言うとおりに座った。

なんか、嫌な予感がする……。

「あのさぁ、一つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

嫌な予感、あたったかも……。

「うん。何？」

私は不安でいっぱいになりながらもいつも通りにこたえる。

「じゃぁ聞くけど、なんで学校では明るくしないの？」

「えっ……」

私は目を丸くしたまま動けなくなった……。

たしかに、私の性格の違いを知っていれば、疑問に思う人もいるだろう。でも今、このタイミングで聞いてくるなんて……ごまかすつもりだったから、どう答えるかなんて考えてないし。

「だって、明るいっていうのが本当の桃山なんだろう？　じゃぁなんで学校では地味でいるんだよ。桃山の良さは、明るくて優しいところなのに」

本当の私……。藤咲君には感謝してる。私を少しだけ、昔の自分に戻してくれたから。でも、

「ごめん。今は言えない……」

私は下を向いたまま、彼にそう伝えた。

まだ、あのことは言いたくない。

「そっか。わかった」

そう言って、藤咲君は台所のほうに歩いていく。

「藤咲君！？　何するの？」

彼は後ろに振り向いて、

「今日は俺がカレー作る！」

そう言って楽しそうにしている彼。

まぁ、藤咲君も楽しそうだしいっか。

「うん。わかった」

ということで、晩ご飯は藤咲君に任せて、私は学校の宿題をやることにした。

「はい。カレーできたよ」

私が宿題を終えて少しあと、カレーができたようで、藤咲君が机まで持ってきてくれた。

「うわぁー。おいしそうー」

そう言いながら、カレーを一口、口の中に入れる。

「かっ、からい」

私は予想以上の辛さに驚きながらも、藤咲君のほうを見てみる。

とうの本人は、おなかを抑えながら笑っている。

「藤咲君！」

私は藤咲君をにらみつける。

「悪い、悪い。最近桃山元気なかったし、全然笑顔見せてくれないから、元気出してもらおうと思って」

そういえば、最近学校のことが気がかりで、全然笑ってなかったっけ。藤咲君、気づいてたんだ。

「ありがとう。藤咲君」

華以外でこんなこと言われたのは久しぶりだなぁ。

「あと、桃山の本当の性格言わないから安心しろ」

「本当に？」

「あぁ」

私はてっきり藤咲君は女の子嫌いだから、周りの男の子に言うのかと思ってた。でも、これで一安心。

藤咲君、私の思ってたような人じゃないにかもしれないなぁ。

ライバル意識

【桜　Ｓｉｄｅ】

次の日学校に行ってみると、みんないつも通り数人でグループを作って話している。

よかった。みんな昨日のこと気にしてないみたい。

「さーくら、おはよ」

今日もご機嫌な華が、私が来たことに気付き、私の席までやってきた。

「華！　おはよ」

華も昨日のこと何も言ってこないし、大丈夫だよね。

私が安心していると、クラスの子たちがざわざわと騒ぎ始めていることに気付いた。私が疑問に思っていると、

「桜、拓海と蓮が来てるよ」

華が前のほうを指でさす。

「あっ！！　本当だ」

私は小さな声でそうつぶやいた。

「あいかわらず目立つよね。あの二人」

「そうだね」

私は、みんなにちやほやされている藤咲君を見て、なぜか遠い人のように思えた。

「なぁーに拓海のことじーっと見てるのよ」

華が私をからかうかのようにそう言ってくる。

「別に見てないよ」

あっ！　しまった！　焦ってこんなことを言ってしまったが、華の性格からしてこんなことを言ってしまったらたぶん、

「ずーっと拓海のこと見てたじゃん。もしかして、好きになっちゃった？」

やっぱり私の予想通り。華はいったんこうなってしまうと、当分の間はこの調子だ。

そんなふうに華と話していると、女の子たちの視線が私たちに向けられていることに気付いた。

私が目の前を見てみると、一ノ瀬君がこちらに向かってくる。しかも、明らかに華ではなく、私のほうに向かってきている。

「桃山桜さん、だよね？」

一ノ瀬君が私と背を合わせるかのようにしゃがみながら聞いてきた。

「そうですけど」

平常心をよそおいながらも、一ノ瀬君の質問に答える。

「ちょっと話があるんだけどいい？」

私に話？　華じゃなくて？

華のほうに視線を送ってみるが、華は首を横に振った。それもそのはずだ。華は藤咲君とはいとこ、一ノ瀬君とは幼馴染であることを秘密にしている。なんでも、女の子たちにいろいろ言われたりするような面倒なことはしたくないらしい。

だから、私を助けることは不可能だ。

私が困っていると、一ノ瀬君の後ろから手が伸びてきた。

「蓮、何してる」

と、藤咲君が一ノ瀬君の服をつかむ。

「拓海、何すんだよ」

「用事も済んだし、教室に戻るぞ」

一ノ瀬君は、不満そうにこちらを見つめている。

「嫌だ」

子供のようにだだをこねる一ノ瀬君。

「戻るぞ」

藤咲君が一ノ瀬君をにらみつける。

こっ、怖い。

「桃山さん！！」

「えっ！？」

二人が教室から出て行ったあと、周りにいた女の子が集まってきた。

「あなた、あのお二人とはどういう関係なの？」

「別に、どういう関係でもないよ。話すのも初めてだったし」

私はいつも通り、そっけない態度で質問に答えた。

キーンコーンカーンコーン

タイミングよくチャイムが鳴り、先生が教室に入ってきたので、みんな次々に自分の席に戻っていく。

「桜……」

華が心配そうに私を見ている。

「華、大丈夫だよ。安心して。私、次の授業サボるね。今日の数学あたっちゃうからさ。先生に適当に理由つけといて」

そう言って、私は教室から出た。

「全然大丈夫じゃないじゃん……」

そんな華の言葉も聞かずに……。

私が向かうのは屋上。あそこならめったに人は来ないし、涙を流しても気づかれないだろうから。そう、私はもう泣く寸前で教室から出てきたのだ。

私が入ってきたときには、すでに一つの人影があった。

「藤咲君？」

私は藤咲君だと思い声をかけた。でも、そこにいたのは……

【拓海　Ｓｉｄｅ】

はぁー。なんで先生なんかにプリントを届けなちゃなんねぇんだ。あぁー。めんどくせぇー。

「で、なんでお前がいんだ？　連」

「いいじゃんか別に。俺も暇だし」

こいつは俺の親友の一ノ瀬蓮。こいつも俺と同じく、女子から結構モテる。もう一人の学校のプリンスだ。それに、バスケ部のエースだ。他のスポーツでこいつに負けたことはないが、バスケだけは一回も勝ったことがない。

だがこいつは、表と裏、二つの顔を持っている。表は女子で言う王子様。裏は自由に自分の気分で動く俺様。このことを知っているのは俺と華だけだ。

俺は先生にプリントを渡し、教室に帰ろうとすると、後ろのほうで女子が騒いでいるのに気が付いた。そこには桃山と華、そして蓮もいた。

俺はその瞬間、無意識に蓮の服をつかんでいた。

「拓海、何すんだよ」

連が後ろに振り向いて文句を言っている。

「用事も済んだし、教室に戻るぞ」

連は不満そうな顔をしながら、

「嫌だ」

と、わがままを言い始めた。

「戻るぞ」

そう言って蓮をにらみつけ、外に連れて行く。

「蓮、何をしてる」

「桜ちゃんとお話し」

お話って……。こいつの行動はいまいちよくわからん。それに、なんだよ桜ちゃんって……。いつの間にそんなに親しくなったんだよ。

「とにかく、目立つようなことはするな。いいな？」

これ以上、桜山を傷つけるわけにはいかない。

「はい。はい。わかったよ。あぁ俺、次の授業サボるから、適当に理由つけといて」

そう言って、手をひらひらさせながら、俺とは反対方向に歩いていく。

「それから俺、桜ちゃんのこと好きになっちゃった」

そうにこやかに言って、蓮は去って行った。

連が、桜山を好きになった？　俺はそう思った瞬間、胸の奥がざわついた。

連じゃ桜山を守れねぇ。俺が、桜山を守る。

俺はその時、そう決意した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2718z/

恋の果実

2011年12月29日10時47分発行